

海軍航空隊整備兵

匿名希望

16歳から徴用⁽¹⁾と言って、広島県の広村にあった第11⁽²⁾海軍航空廠で無線の修理を行っていた。ここにいたのではいけないと思い、18歳になってすぐに兵隊に志願し、試験を受けたら合格した。海軍航空隊整備兵⁽³⁾になるため、大竹海兵団で3ヶ月間の新兵教育を受けた。そこでは、「死ぬ」ということはなんとも無いということ教えられた。30人一組で1人が失敗すると全員が罰を受けた。それは、野球のバット(木製)で尻をおもいきり3回叩かれるというもので、5回も叩くと死んでしまう。叩く場所が背骨にずれようものなら、背骨が折れて即死してしまうこともあった。背骨が折れるかバットが折れるかというくらいおもいきり叩いたので、アザでお尻が何日も真っ黒になり、皆お風呂で患部を揉んでいた。それに耐えられない者は、首を吊ったり、腹を切って自殺していった。とてもかわいそうだったが、その処分も自分たちでさせられた。それは激しいものだった。

新兵教育が終わると、今度は厚木海軍航空隊で4か月間、飛行機の整備兵となるための教育を受けた。飛行機のエンジンを分解したり組み立てたりして、一生懸命に修理に必要な技術を習得していった。そこでは、新兵教育の時のような暴力はなかったが、失敗するとすぐにビンタが飛んで来るといった状況で、指導が徹底していた。

4か月間そこで修業し、飛行機の構造を一通り覚えると、今度はいよいよ呉海軍航空隊に配属となった。そこでは陸上飛行機、水上飛行機⁽⁴⁾、戦体の真下に船の付いた戦闘機や、3人乗りの偵察機⁽⁵⁾などのエンジンの修理を行っていた。ある日突然、B29が飛来し、何か黒いものが落ちてくると見ていると、「ドンドンンドン」と大きな1トン爆弾が落ちて来て、滑走路にいくつも直径10mの大きな穴を開けた。爆弾の爆風により割れた窓ガラスや部品が飛んで来て、多くの死傷者を出した。その中で1人、腕組みをして微動⁽⁶⁾だにせず座っている者がいた。よく見ると爆弾で顎を吹き飛ばされ、大量の血

が流れていた。それから10分もしないうちにそのまま倒れて死んでいった。一度空襲にあうと、何十人と人が死んでいった。空襲から逃れるため、設置してある防空壕に逃げ込んだ。防空壕の形にも色々あり、入口から真っすぐに穴が伸びるものの場合、入口に爆弾が落ちると爆風が奥まで達し、多くの人が中で死んでいった。途中で曲がっているもの、地下へ伸びるものであったらまだ良かったが。また、真っすぐ伸びる防空壕では、入口に向けて20ミリ機関銃が一発発射されると、中で5人くらいの体を貫通し多くの人が倒れていった。それは悲惨なものだった。

滑走路が使えなくなったため、今度は佐伯海軍航空隊へ配属となった。しかし、そこでも、陸にあった滑走路は米軍の空襲で使えなくなったため、水上飛行機への切り替えが行われた。⁽⁷⁾ブイを海上に浮かべ滑走路をつくり、そこから飛び立って行くようになった。水上飛行機だけに毎日エンジンの



点検が必要で、海の中に入りエンジンを分解して点検し、再度エンジンをかけて調子を見ていた。そんなある日、いつもの空襲であればB29の爆撃機がやってくるので気付くのだが、その日に限って中型の飛行機が海面すれすれを飛んできたため全く気付かず、音が聞こえて初めて気が付いた。急いで飛行機を退避させるため、搭乗員を呼びエンジンを始動させた。その時、自分もすぐに海に飛び込んで逃げればよかったのだが、翼につかまってしまい、海上から離水寸前に海に飛び込んだ。もう陸は見えないくらい沖合にいて、「死んでしまう」と思った。陸を目指し6時間くらい泳いだところで漁船に助けられ何とか一命を取り留めた。

佐伯航空隊では、特攻隊を2回見送った。特攻隊の出撃は1度に10機。夜の12時に搭乗員10名を集めて御膳で御馳走を食べさせ、出発は1時間後。戦闘機は腹に10

0キ口爆弾を1つ抱え、投弾できないように細工されていた。時刻が来て、10機の特攻隊が出撃後、監視及び戦果の報告のため1機の偵察機が後を追う。偵察機は目標近くで特攻機に命令し、全てを見届けた後帰還してきた。しかも、特攻機には片道分の燃料しかなく、既に退路は断たれていた。とてもかわいそうで気の毒だった。

佐伯航空隊も使えなくなり、今度は山口県の大浦基地に異動となった。整備兵12名、搭乗員と10機の飛行機と共に行ったのだが、そこは20軒ほどの民家が軒を連ねる部落で、その公会堂を借りて1ヵ月ほど過ごした。しかし、そこも米軍に発見され、今度は3人乗りの偵察機でやって来て、30センチほどの1キ口爆弾を飛行機目がけて投げた。かと思うと、今度は逃げまどう自分たちに機銃掃射してくるのだった。

その後も各地の基地を転属し、最後にソ連軍からの本土防衛のため、青森県の下北半島にある基地に転属となり、そこで終戦を迎える事になったのだが、ここで最も忘れることができない経験をする事になった。そこも小さな部落で、公会堂を借りて20名の仲間とともに生活し、一たび空襲となれば周りの民家を守るという気持ちはあるのだが、敵も迎撃を警戒し、高空からではなく海面すれすれを飛行してやって来た。音がして初めて気付くという状況で、敵機はもうすぐそこまで来ていて、飛行機や逃げまどう人々に向けて機銃掃射した。自分は近くにあった大きな丸太を抱え、銃撃してくる方向にそれを向け、自分の身を守った。多くの方は防空壕に逃げたのだが、その中で機銃の犠牲となり、何人もが死んだ。20人いた仲間のうち、生き残ったのは7人だけだった。日付は8月10日、兵士も含め何十人という遺体を埋葬しなければならず、生きた心地がしなかった。田舎なので何もなく、幸いガソリンはあったので、畑の中に穴を掘り、遺体をその中に集めガソリンをかけて3日間以上かけて火葬した。その時忘れもしない出来事があった。1人の女性が地面を這って自分の所へやってきた。年齢を聞くと「20歳」と答え、女性は「兵隊さんは良い薬を持っているはずだから、その薬を塗れば治るかもしれない。」と言う。塗り薬程度しかないが「何処だ。」と聞くとお尻のあたりを見せた。見ると銃弾が当たらしく、お尻に人差し指くらいの穴が開いていた。「こ

の程度なら」と薬を塗ったのだが、体を仰向けにしてみると、腸や子宮が体から飛び出し、それを引きずって這って来たのだった。しばらくして、その女性は目の前で亡くなった。ここでの出来事は、本当に辛く悲しい経験で、夢にまで出てきたものだった。

最後の所属では、ラジオはなく連絡手段も何もなかった。そのせいで終戦を知ったのは10月の終わりごろだった。それまでは食べることに一生懸命で、貨物でやってきた旧日本軍の兵士に知らされた。それから佐伯航空隊まで帰ることになったのだが、お金も何もないので、やってきた人のトラックに7人乗せてもらい駅まで送ってもらった。聞けば、元兵士はタダで列車に乗れるということで、貨物に揺られ5日間かかって隊事務所まで戻った。道中、岡山駅、広島駅と通過したが、駅から遮るものがない焼け野原で、これから一体どうなるのかと思った。そのうえ、やっとの思いで着いた航空隊事務所はもぬけの殻で、命あった喜びからか、皆いち早く引きあげたのだった。すべてが終わり、家に帰り着いたのは年が明けた2月5日だった。

本当に自分でも良く生き抜くことが出来たと思う。亡くなった人は本当にかわいそうだった。仲良くしていた戦友は、体中を銃で撃ち抜かれ、見る事が出来ないくらいの有様だった。見た者でなければわからない。家に帰る時、軍服などを持って帰ったが、見るのが辛くて写真以外は全て焼いた。

-
- 1 徴用...戦時などに国家が国民を強制的に動員して、兵役以外の一定の業務につかせること。
 - 2 海軍航空廠...航空機の修理整備（末期には製造）を担当する航空本部所管の「空廠」。
 - 3 整備兵...軍用航空機の整備にあたる大日本帝国海軍の兵種。
 - 4 水上飛行機...水面上に浮いて滑走が可能な船型の機体構造、あるいは浮舟（フロート）のような艦装を持つことによって、水上にて離着水できるように設計された航空機。
 - 5 偵察機...敵性地域などの状況を把握するために偵察など情報収集を行う軍用機（航空機）のひとつ。
 - 6 微動だにせず...少しも動かない様子。
 - 7 ブイ...港湾などで、水面に浮かべておく目印。